

販売、購買、営農支援の3事業を柱に北海道農業の発展に貢献するホクレンは今年、創立100周年を迎えた。同じく今年100周年を迎える十勝毎日新聞社の林浩史社長が内田和幸会長に、ホクレンの果たしてきた役割や今後の事業展開について聞いた。(文中敬称略)

対 談 ホクレン・内田和幸会長×十勝毎日新聞社・林浩史社長

「共生の大地・北海道 農と食の未来担う」

十勝は農協をうまく活用 酪農伝えた「なつぞら」

◆障害を克服し知恵出し合う

林 4月18日に行われたホクレン創立100周年記念式典に参加した。感動し、北海道農業への貢献を改めて実感した。100年の節目をどう感じているのか。

内田 積み重ねでホクレンの今の姿がある。北海道の農業者が生産した農畜産物を食べている消費者、取引先、会員JAに改めて感謝したい。創業以来、小林篤一（ホクレンの前身組織の提唱者）が農業者同士助け合って生産しなければならないということで、それをスタートにしている。

北海道の過酷な条件の下、協同組合の精神に基づいて農業者同士が支え合い、いろいろな障害を克服し、互いに知恵を出し合い、寄り添い合ってきたことがホクレンの姿だと思う。

林 小林篤一もそうだが、自分たちの利益優先ではない考え方があるのでは。

内田 北海道の過酷な状況では、1人で生きていけない。物を作って販売するにしても、多くの仲間と作り、消費者に安定供給している。生産資材の供給・調達にしても、多くの人が集まることにより、価格を下げ、それを購入し、使ってもらう。互いに助け合い、その中でいろいろな課題や問題を克服する協同組合の精神が原点にある。

林 脈々と精神が受け継がれている組織なのだと強く感じる。

内田 100周年を機に経営理念を出した。これからも共に助け合い、将来にわたって、われわれが農と食の未来を担うという固い決意を、生産者、消費者など対外的に分かりやすい表現でメッセージとして出した。「つくる人を幸せに、食べる人を笑顔に」。今までもそうだが、それを確認することによって改めて重みのあるものとした。

林 グローバル化など農業を取り巻く環境は厳しい。今後の事業展開は。



北海道・十勝の農業の未来について語り合った
内田和幸会長と林浩史社長（左から）

◆販売と購買営農支援が柱

内田 先人たちから生産基盤が受け継がれ、いろいろな加工施設が造られてきた。その施設をさらに活用し高めるという意味では、三本柱である販売、購買、そしていろいろな状況に見合った中で農家、組合員の声を聞きながら迅速に対応できる営農支援、この三位一体の事業展開をすることによってさらに生産性を高め、農業者の所得向上に貢献していくことが当面のやるべきことと考えている。

林 貿易自由化など外的要因についてはどう思うか。